



ILC グローバル・アライアンス 年次総会議事録 2013



ナショナル・ボランティア・フィランソロピーセンター
シンガポール

June 19-21, 2013

【 出 席 者 一 覧 】

■ 共同議長

Dr. Monica Ferreira (南アフリカ)

Baroness Sally Greengross (英国)

■ 投票メンバー

Ursula Staudinger (アメリカ)

Kunio Mizuta (日本)

Francoise Forette (フランス)

Sally Greengross (イギリス)

Rosy Pereyra (ドミニカ共和国)

Monica Ferreira (南アフリカ)

Lia Daichiman (アルゼンチン)

Jayant Umranikar (インド)

Marieke van del Waal (オランダ)

Sara Caramel (イスラエル)

Mary Ann Tsao (シンガポール)

Alexandre Kalache (ブラジル)

Masako Osako (事務局)

■ 非投票メンバー

Kavita Sivaramakrishnan (アメリカ)

Yoko Shido (日本)

Shinichi Ogami (日本)

Noreen Siba (イギリス)

Sebastiana Kalula (南アフリカ)

Susana Harding (シンガポール)

Angelique Chan (シンガポール)

Louise Plouffe (ブラジル)

■ 欠席

チェコ共和国、中国



6月19日（水）

◆◇共同プロジェクト会議◆◇



1. 開会の辞

開会に先立ち、フェレイラ氏より共同研究はILC GAの使命に欠かせない活動で、相乗効果をもたらすと同時にGAの生産性や妥当性を示すものであることが述べられた。ILC GAにおける「共同研究」とは2ヶ国以上のパートナーが共同で作業し、その目標として特定の目的、結果、成果があることであると定義された。ILC GAで行われる研究の量や範囲が広がっていることについて謝意が表されると同時に、より厳密な手法や科学雑誌の論文などを使い研究の質を早急に向上させる必要があるとの指摘がなされた。

ILC 米国が入っているコロンビア大学のロバート・バトラー・エイジングセンターの新理事長であるスタウジンガー博士も初めてILC GA年次総会に参加し、自己紹介と今後のエイジングセンターの活動概要を報告した。

エイジングセンターでは3つの事業を手掛ける予定。1)研究と教育に専念するコロンビア・エイジング・ラボラトリー 2)一般市民への教育、アドボカシー、企業への助言を行うナレッジセンター 3)ILC 米国。



2. 研究についての報告とディスカッション

A. 完了した研究

A1. 理想の看取りと死に関する国際比較研究

ILC 日本より「理想の看取りと死に関する国際比較研究」完了の報告があった。この研究にはオーストラリア、チェコ、フランス、イスラエル、日本、韓国、オランダ、英国、米国のデータが使用されている。この研究は 2009 年から 2011 年にかけて行われたもので、多くの出版物が発行された。この報告は 2013 年度国際老年学会の「看取りの問題に取り組む：研究・政策・実践についての国際的視点」というセッション(ILC イスラエルが議長)で発表される予定。

A2. プロダクティブ・エイジング：状況と機会(冊子出版)

ILC チェコによって 2012 年に冊子が出版されたことが報告された。フェレイラ氏より記事を執筆した ILC メンバーに謝意が表された。冊子はウェブサイトから閲覧可。

A3. 共同論文「世界の高齢者と住宅」の ILC GA ウェブサイト上での発表

「世界の高齢者と住宅：何が最善策か？」というタイトルのディスカッションペーパー(e-dialogue)が出版されたことが ILC 南アフリカと ILC 英国により報告された。10 カ国の ILC センターから寄せられた各国での高齢者の住宅事情が集められている。E-dialogue により高齢者の住宅について議論が始まると予想されていたが、ILC 英国の報告によるとこれまでのところコメントは寄せられていない。インターネットの検索で ILC-GA のウェブサイトが引っかけられるように、世界の読者や ILC センターにとって関心のある情報を掲載しサイトを常に更新していくことが重要だ。

B. 現行プロジェクト

B1. プロダクティブ・エイジングと介護制度に関する国際比較研究(アクティブ&ヘルシーエイジングプロジェクトも含む)

ILC 日本より研究の概要について説明があり、これは 2012 年度の研究の継続であること、高齢者の社会参加と雇用という2点に焦点が絞られているということであった。2012 年は高齢者の社会参加を支援している団体の管理者に対してインタビューを行った。2013 年度は積極的にボランティア活動を行っている高齢者本人へのインタビューを計画している。



労働市場の現状と絡めて定年退職について理解することが重要であると ILC 米国からコメントがあった。例えばドイツでは労働力が不足しているため、企業は社員を引き止めている。ILC-UK より英国では法定退職年齢が廃止されたとの報告もあった。ILC 日本は ILC シンガポール、オランダ、フランス、英国と共に各国での高齢者への介護サービスについて最新の情報を入手する予定であることも報告された。

B2. インフォーマル・サービスについての国際的視点

ILC イスラエルよりインフォーマル・サービスについて ILC10 カ国における調査の報告があった。サービスが提供されているかどうかは国によって大きな違いがあるものの、インフォーマルケアを行っている介護者たちの経済的・精神的支援が必要であるとのことであった。

ILC 英国と ILC シンガポールより、両センターでも介護について調査を行っており ILC イスラエルの調査と他センターでの研究を組み合わせることは可能かどうかについて検討することとなった。

B3. 看取りの問題に取り組む：国際老年学会での ILC シンポジウム

国際老年学会ソウル大会において「看取りの問題に取り組む：研究・政策・実践についての国際的視点」をテーマにシンポジウムが開催されることが報告された。ILC イスラエルのサラ・カーメル氏その他、辻彼南雄氏(ILC 日本)「9 カ国での看取りと専門家の役割について」、Chetna Malhotra(ILC シンガポール)「シンガポールの高齢者の看取りに関する希望」、Hana Vankova(ILC チェコ)「認知症患者の看取り」による発表が予定されている。

C. 今後のプロジェクト

以下のようなプロジェクトが提案された。

C1. 国際比較データセット<Axel Borsch-Supan 博士と共同> (アメリカ)

ILC 米国より「国際比較データセット」プロジェクトの計画について説明があり、ILC 各国への協力要請がなされた(マックス・プランク社会法・社会政策研究所所長 Axel Borsch-Supan 博士と実施予定)。

データ収集にあたっては、出来る限り既存の研究機関のデータを使っていくことを想定しており、例えば、HRS(米国)、JSTAR(日本)、ELSA(英国)、SHARE(欧州大陸とイスラエル)、LASA(インド)、ELSI(ブラジル)、CHARLS(中国)などが活用できるのではないかと提案があった。



C2. 高齢者のセルフケアと健康<SCOPE> (シンガポール)

2011年以降試験的に行われているこのプロジェクトは、高齢者の自発的な健康追求行動に焦点を当てていることが報告された。研修を受けた地域の保健ボランティアがおよそ400名の比較的健康的な高齢者(その中の相当数が高血圧や糖尿病を患っている)に対して健康への自己管理指導を行っている。

C3. サクセスフル・エイジング実現のための地域づくり（シンガポール）

高齢者がエイジング・イン・プレイスを実現できるようにするために、統合的な地域密着型の一次医療および精神・社会的ケアサービスを提供するシステムを開発中である。本人中心の、予防的な、生涯にわたる、地域社会への参加と公衆衛生のアプローチに介護サービスを組み込むことが必要であり、2013年度末から2016年度末まで行われる予定。

C4. 介護予防:アクティブ・エイジングと転倒（南ア、チェコ）

C5.年齢と高齢化:状況に応じた研究課題と政策方針(インド、ブラジル、中国、南ア)



6月20日(木)

◆◇2013年度ILC年次総会◇◆



1. 開会の辞

グリーンクロス共同理事長 から歓迎挨拶と欠席者の報告があった。

2. ILC インドゴカレ名誉理事長の追悼

グリーンクロス共同理事長は故ゴカレ前 ILC インド理事長のグローバル・エイジング、ILC グローバル・アライアンス、そしてインドや南アジアの高齢化問題に対する業績に敬意を表した。

3. 昨年の年次総会議事録の確認

2012年5月27日、プラハ会議の議事録について、満場一致で承認された。

4. 事務局からの報告

昨年の事務局の活動について事務局長より報告。

内規改訂、ウェブサイトおよび新理事長選出委員会への関わりや、国際機関への出席、その他国内外での多岐にわたる活動が報告された。

新理事長が赴任した ILC 米国とは、これからも業務を通じた密接な関係を構築していきたい、との意向が述べられた。

5. 資金関係

昨年度の収支決算および今年度の収支予算状況が報告され、満場一致で承認された。

6. 各種委員会からの報告

6.1 内規検討委員会

内規改訂案が示され、全会一致で承認された。
最終的にはプロの弁護士によって確定される。

6.2 共同理事長の指名・選出委員会

2014年からの共同理事長の任期は、一期3年とし、二期目の再任も可能。

6.3 事務局体制と機能検討委員会

南アより事務局体制・機能の改訂案が報告され、全会一致で承認された。

6.4 新規加盟

英国より新規加盟申請状況について報告。

オーストラリアからは ARC Centre of Excellence in Population Ageing Research <CEPAR> (John Piggott 氏) と Australian Population and Migration Research Centre <APMRC> (Helen Feist 氏) の2団体が候補として挙げられている。

うち、CEPAR はコンソーシアムであるが、そのメンバーの1人であるニューキャッスル大学プライオリティリサーチセンターの Julie Byles が午後の部に参加し、コンソーシアムについて簡単なプレゼンテーションを行った。

7. 国連との関係

アルゼンチン、ブラジル、事務局より Open-ended Working Group(OEWG)への参加など、国際及び地域レベルでの ILC メンバー関与について報告。

国連社会開発委員会、GAROP(高齢者の権利に関する世界同盟)、ウィーンおよびジュネーブでの国連の会議参加など。

8. ウェブサイト運営委員会

英国より前年よりILC GA のサイトについての報告があった。

ウェブサイト運営費については外部スポンサーからの支援が打ち切られた場合は、GA の資金より捻出する予定である。

9. 各国活動報告

中国を除く13カ国の活動報告がアルファベット順で行われた。

日本は、ILC 各国の協力のもと、終末期ケアおよびプロダクティブ・エイジングについて調査研究を行い、高い評価を得たことを報告するとともに、引き続きプロジェクトへの協力を要請した。また、その成果をもとに長寿リテラシーの普及と啓発に努めていること、さらには企業とのコレボレーションも新たな事業展開として推進したことを報告した。

スタウジンガー米国センター新理事長からは、各国がそれぞれの活動を報告するだけでなく、ILC-GA 全体として調査研究のレベルをどのようにあげていくかを考えることが重要であり、今後米国が取り組もうとしているコンソーシアム(大学・シンクタンク・ILC)による、データベースの構築に、各国の協力を仰ぎたい旨が表明された。

10. 次期年次総会

2014年の年次総会は10月にイスラエルでの開催が決定。シンポジウムの仮テーマは、「高齢者の自立と暮らしの継続」。

6月21日(金)

◆◇ILC GA 主催国際シンポジウム◆◇

「Future of Ageing」

シンガポール国立大学講堂



◇ロバートバトラー博士メモリアルレクチャー◇

「所得保障と社会福祉の未来:先進国・開発途上国の世界的傾向について」

-Mukul Asher(シンガポール国立大学教授)

◇プレゼンテーション◇

1. 「健康と健康管理の将来」 (ブラジル、ドミニカ共和国、アメリカ)
2. 「地域における介護の経済的効率化への課題と実践」 (オランダ、日本)
3. 「高齢者のエンパワーメントと社会参加①」 (イギリス、インド)
4. 「高齢者のエンパワーメントと社会参加②」
(アルゼンチン、ドミニカ共和国、南アフリカ)
5. 「生涯学習の今後①」 (フランス、中国)
6. 「生涯学習の今後②」 (チェコ共和国、イスラエル)
7. 「前進:高齢化の将来」 (シンガポール)

